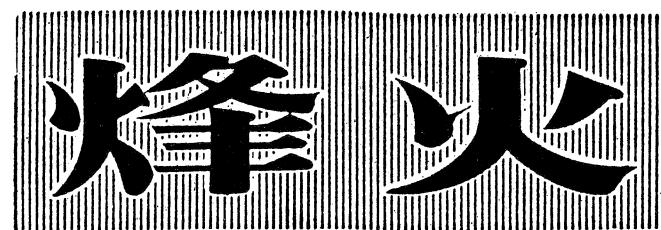


☆帝国主義の侵略反革命、社会帝国主義の武装反革命を粉碎し、世界革命戦争—世界プロ独を組織する世界単一党を国際階級闘争の最前線に組織せよ！

1978年
3月25日
第315号
編集発行人 高木一夫
一部 150円



共産主義者同盟（全国委員会）

■ 大阪戦旗社 大阪市大淀区本庄東2丁目2の31
とみやビル15号 (06) 371-3706
■ 東京 新宿北郵便局 私書箱 2018号
■ 沖縄 那覇東郵便局 私書箱 2016号

三里塚開港阻止！一番機飛来阻止！

決戦を武装蜂起の序幕とせよ



開港阻止決戦の火ぶた切る（3月1日）

全国の同志諸君！たたかう労働者人民諸君！
「現下の労働運動が、社帝・右翼日和見主義の占拠のもと經濟主義に深く支配されていること、さらに、偉大な前進を刻印してきた被抑圧人民の個々の階級闘争がまさしくその自然成長と、そのもとでの決起の最終局面に逢着していること。この事実の中にこそ、革命的プロレタリアートのしっかりとふまえねばならない階級闘争の現実がある。われわれは確認しなければならない。この階級闘争の現実のだから武装蜂起にまで継続する革命的政治闘争を組織してゆく一切の苦闘の過程こそ、当面するプロレタリアートの革命的政治的任務なのである。」（烽火三一四号）
われわれは七八年の年頭にあたってこのように提起した。事態の動向はこの見地に立脚した革命的政治的決起の組織化の重大性、緊要性を完全にうらづけている。
労働戦線では総評富塚「連合の時代」路線の全面开花が、労働者の決起を封殺し、他方、日本階級闘争の最先端たる三里塚では蜂起的状況が現出している。われわれはいま、帝国主義が勝利を独占し人民が武装解除される「反動の年代」を経験しているわけでは決してない。しかしあらゆる階級と階層の大多数が、階級闘争の戦場に公然と進出し、一大激突をくりひろげる「革命の年代」に存在しているわけでもない。それはまだはじまつたばかりである。ぼう大なプロレタリア大衆は、いまだ帝国主義と社会帝国主義のくびきのうちで呻吟している。

ただひとつ革命的階級たるプロレタリア階級の戦士諸君。接近しつつある革命的情勢の到来をみずからきりひらき、この結末を武装蜂起—プロレタリア独裁の勝

三・四月

現地大闘争へ

利へと帰結せしめるべく、われわれは自己を政治的・組織的・軍事的に飛躍的にうちきたえねばならない。自己を社帝の経済主義改良主義||中間連合政府路線ときつぱりと峻別せよ。革命党の計画され組織された活動と不可分に融合したプロレタリア階級の闘争を一步歩創出し、被抑圧人民大衆を自己のまわりに圧倒的にひきつけよ。蜂起の機関||ソビエトと、革命の正規軍||赤軍を、今日の時代からたゆむことなく建設してゆく事業に着手せよ。わが党は、プロレタリアートの前衛党としてこれを援助し、先頭に立ち、これらを「武装せる革命の伝導路」の建設へと統合的におしすすめてゆく決意である。

帝国主義の侵略反革命、社会帝国主義の武装反革命を粉碎し、世界革命戦争—世界プロ独を組織する世界単一党を国際階級闘争の最

前線に組織せよ！ 民族解放—社会主義勢力の前進と結合し、日帝の侵略反革命を内戦へ転化せよ！ 革命的労働者人民は共産同全国委員会に結集し、プロレタリアートの武装蜂起—プロレタリア独裁を組織する中央集権合法党を戦取せよ！— この総路線スローガンのもと、全党と革命的プロレタリアートはさらに固く結束せん。

全国の同志諸君！たたかう労働者人民諸君！

三里塚の史上最大の決戦はじまつた。社共制圧下の七八春闘の内から外からプロレタリアートは決起し、この偉大な人民闘争の革命的実践と経験を、日本階級闘争総体の歴史的地平へと転化すべく奮闘せねばならない。

三月開港阻止・一番機飛来阻止・三里塚闘争勝利の全人民的政治闘争を中心、たたかう労働者人民は今春期闘争にたちあがれ。

反革命突破とたたかいぬけ

ヤルタリジュネーブ体制の崩壊以降の帝国主義の世界的危機の深まりは、各国の資本主義的基礎そのものをゆさぶり動かしながら、最後の破局にむかう突進を開始した。帝国主義間対立の激成、帝国主義と社会帝国主義の連合と抗争、そして世界革命へと決起するプロレタリアートのたたかいの前進が、この時代の根本的特徴をなしている。

しかし帝国主義は相互の抗争にあけくれながらも帝国主義間の世界戦争が一直線にプロレタリア世界革命の道につながる歴史的根拠を自覚するがゆえに、帝国主義であるかぎり避けられない帝国主義間の掃討戦の激化を、人為的に緩和せんと努める。協力関係の強化が叫ばれる。次の日それは反目と、再びのいがみあいにとつてかわる。この出口なき矛盾と危機の内部で、各帝国主義が延命のためにとることのできる方法は次の三点以外にはありえない。①侵略反革命を強化し、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国への新植民地主義支配を維持・拡大すること ②帝国主義間の通貨・通商・資源をめぐる強盗戦争において、より有利な地位を確保すること ③自国内労働者人民の憤激を鎮静化し、階級闘争総体を圧殺し、ファシズムを準備すること—これである。自国の社会帝国主義諸政党を広範にひきこんで成立する中間連合政府は、この忠実な執行政府である。

わが自國帝国主義||日本帝国主義にあっては事態はどうか。われわれは中間連合政府攻撃を統合軸として進行する事態の特徴点と、その反人民的、反革命的性格をプロレタリア人民の前に暴露せねばならない。

第一に、慢性的円高危機に波状的にみまわれる日本資本主義は、行き場のない構造的危

機にたたきこまれていることである。世界的通貨危機こそ、帝国主義間戦争の今日的発現形態であり、円高とは日本資本主義の根底的危機の直接的反映にほかならない。

三月六日、世界的なドル安引き金にして、円は一ドル||二三五円台を記録し、十六日のドルショック時に比べ三五%、七七年からの噴出が存在した。ブルメンソール(米)とシユミット(西独)の会談の決裂(二月十三日)は、米帝を主導とした米・日・西独の三國が世界経済の危機を再建するとして米帝によつて提唱された「三つの機関車国論」の破綻であった。米帝はこれをもつて、通貨面で円・マルクの実質切りあげをせまり、日・西獨国内需拡大を要求し、自国の貿易大巾赤字(昨年二六七億ドル)の解消と、米資本の国際競争力の強化をもくろんだのである。日本帝は「経済成長七%要求」を甘んじて受け入れたが、西独帝は米帝の国内景気刺激策強要をけつたのである。「再度の円高」もまた、激烈な帝国主義間抗争の必然的産物であった。

こうして、依然ドルを基軸とする変動相場制下での通貨危機は、慢性的な円高危機をもたらし、経済成長そのものを輸出に依存し少・出血輸出→貿易黒字→円高という破滅的循環は構造的なものである。プロレタリアートにとつてこの循環過程のいつさいの結果は、集中された資本による一層の搾取と収奪

の強化であり、市場・原材料・土地・労働力の強奪を目的とした帝国主義の市場再分割戦のものでもない。この循環過程がプロレタリアートにとつて意味をなすのは、ただ、プロレタリアートが打倒すべき資本主義の危機そのものが、この過程をとうしてますますらん熟してゆくことである。

第二は、日本資本主義の危機の中で、大資本による中小資本の駆逐と糾合、生産と生産の集積が大規模に進行し、金融寡頭制が強化が不可避的に進行していることである。永大産業の倒産をはじめとし、造船、紡績平電炉などのいわゆる構造不況業種の大型、中型倒産があつた、他方、合纏大独占の「四グループ化構想」を筆頭に、輸出産業を中心としたトラスト化の動向が顕著である。

構造不況対策法案閣議決定に示される過剰生産と生産手段を国家独占資本主義的に統制してゆくといふ政策が、このようない動向の統合軸として強化され、日本における金融寡頭制の強化は急速度におしすすめられている。生産と生産手段はますます社会化されてゆく。しかしあいかわらずそれらは独占資本家に私的所有されたままである。金融寡頭制が強化されればされるほど、社会的生産と資本主義的取得のあいだの矛盾は拡大し、それは今日、ぼう大な失業者と、プロレタリアートは、この悲惨と貧苦の現状を、ブルジョアジーへの嘆願と協力ではなく、プロレタリアートの团结と階級闘争への転化に結論づければならない。

第三は、アジア朝鮮侵略反革命戦争の準備と人民のそのもとへの動員をねらつた、反革命防衛論議の上からの組織化といふ許すまじき事態である。

「世に攻撃的軍備と防御的軍備を区別する説があるが、区別は困難だ」(栗橋統幕議長・一月四日)、「敵に脅威を与えるなくて何の防衛か」(金丸防衛廳長官・一月八日)、「その時点、時点の科学技術の進歩によつて、憲法九条二項で許される自衛力の限界に変化があつてしかるべきだ」(真田内閣法制局長官・一月三十一日)、「朝鮮有事に際して、日本政府が難民救済にあたる場合は、警察、海上保安庁などのほか自衛隊が協力することはありうることだ」(伊藤防衛廳長・三月二日)、「憲法九条の趣旨からいくと、核兵器をいつさい持つべからずとはなつていなし」(福田首相・三月十一日)

一連の発言の反革命的意図はあきらかである。焦点は「戦後自衛隊」からの脱皮にしほられないのである。二十六万の兵力を擁するブルジョア軍隊||自衛隊を、朝鮮アジア侵略反革命戦争のための即戦力、実戦部隊として、

国内内乱・内戦に対する反革命治安出動部隊として完成化させてゆくことに徹頭徹尾、目的はおかれていたのだ。朝鮮侵略反革命戦争準備を急ぐ日帝にとって、「憲法九条」「シリアンコントロール」「専守防衛」「非核三原則」「GNP+%」などは、もはやことごとく桎物なのである。

これと歩調をあわせて、二月二日には日向方齊閥経連会長が「自衛隊を長い間、日陰者にしてきたことは欧米では考えられないことだ。これからは日米安保条約の上に安眠をむさぼらず、防衛のありかたを正面から再検討したい」とぶちあげ、また三月一日の両日、永野日商会頭、土光経連会長が記者会見し、政府は武器輸出禁止措置を弾力的に運用せよと、あからさまにのべたのである。まさに軍事力増強の策動は、公明党的自衛隊承認声明などを引き出しつつ、官民一体となつた排外主義育成の社会運動として組織されているのである。その成長する先がファシズムであることをプロレタリアート人民は、はつきり見ておかねばならない。

他方、日米安保の「第二次朝鮮戦争」を想定した侵略的再編が急ピッチで進行している。三月七日、実質上の米日韓合同演習「チームスピリット作戦'78」が、米韓両軍十一万人を動員し、韓国全土を訓練場と化して強行された。今回の大演習は、フォーカス・レチナ（六九年）、フリーダム・ボルト（七一年）をはるかにうわまわる米軍戦後最大規模のものであった。在日米軍基地、横須賀、横田、岩国、そして沖縄基地が全面稼動した。まさに今日、日米安保体制は、日帝の軍事力増強を不可欠の要素として、朝鮮民族解放・社会主義勢力に対する、侵略反革命戦争遂行体制としての純化の道をまっしぐらにつき進んでいるのだ。

第四に、革命党と共産主義運動に対する破防法攻撃が、刑法全面改悪を頂点に、刑訴法改悪、少年法・監獄法改悪策動などとして打ちおろされていることである。

二月十三日、法制審議会相瀬戸山は、「当面の過激派・ハイジャック対策」と称して「人質強要行為処罰法案」「逃亡犯罪人引渡法改正」とともに、「弁護人ぬき裁判法案」を特例法として三月中に国会に提出すると発表した。当初、現行刑訴法二八九条「必要的弁護」（懲役三年以上の刑罰に相当する事件の裁判では弁護人がいなければ、法廷を開けない）の規定の抹消をねらって法制審に答申された「弁護人ぬき裁判」法制化策動は、単独立法化にきりかえられたとはいえ、その反革命的性格に何ら変化があるわけではない。それは、①革命派と戦闘の人民から弁護人依頼権、公開裁判権を剝奪するものであり、②先进的弁護士の弁護活動を奪い、彼らを社会的に追放せんとするものであり、③東京地裁を

ぬき裁判強行（水俣病チッソ公判、反日武装戦線公判など）を合理化し、法制化せんとするものである。日本階級闘争史上、これと同様の法令がもち出されたのは第二次帝国主義戦争下の一九四二年、「戦時刑事特別法」においてである。日本帝国主義の体制的危機と日本共産主義運動の武装蜂起にむかう成熟は、ついに、ブルジョア民主主義の外皮をぬぎしてた戦時立法の「特例法」を公然化させているのだ。そしてこれが、刑法・刑訴法の法体系そのものに対する全面的再編と、刑法・刑

筆頭にして先行的におこなわれてきた弁護人の裁判強行（水俣病チッソ公判、反日武装戦線公判など）を合理化し、法制化せんとするものである。時を同じくして二月十六日、西ドイツでは、弁護人ぬき裁判、接見制限、捜査権拡大を明文化した「テロ対策法」が成立した。西独社民政権シユミットを先頭にしてある。中間連合政府攻撃下で進行する破防法攻撃に對峙し、たたかう労働者人民は、刑法・刑訴法改悪策動を許さず、「弁護人ぬき裁判」立法化とたたかう戦列を強化せねばならない。

革命的政治的決起を創出せよ

以上の日帝の危機反革命突破のすべては、ブルジョアジーによるプロレタリアートの支配の強化——プロレタリアートの悲惨と苦痛につらぬかれている。「春闘三連敗」として描写される労資の攻防は、それ自身ブルとプロとの力関係の反映なのであるが、われわれはその背後に隠されている労働者支配の性格をつかみとり、労働者の決起と、これが武装蜂起——プロ独へとむかうための前進の条件がどのように形成されてゆくのかを明らかにしなければならない。ブルジョアジーと資本の労働者支配は次のものとしてある。

第一は、生活破壊と失業の嵐のごとき攻撃である。日本資本主義は危機の乗りきりを伝統的な強奪、強収奪の基礎のうえにおく。パートタイマー、社外工、臨時工の解雇はもとより、一時帰休、出向、実質賃金引き下げから、ついに不況産業を中心とした「本工」の首切りに資本の攻撃はおよんではいる。金融寡頭制の強化——国際競争力の強化と輸出攻勢——「円高不況」は、日本型終身雇用制を動搖させ、中高年層を軸とした失業者の増大、スクランブルアンドビルドによる産業構造の再編を必然化させる。すなわちプロレタリアートはブルジョアジーのもとで、もはや「安定した生活」をのぞむことはできない。同時にこの過程は「安定した労資関係、労使正常化」を、暴力と幻惑のあらゆる手段を駆使してつくり出してゆかんとする過程であった。合理化をつうじての職場秩序の完全な掌握、労働者間の分断、抵抗する部分の追放としてそれらはたちあらわれた。

第三に、これらの攻撃は、ブルジョアジーの手代、IMF・JC一同盟そして総評民同の積極的協力を条件として貫徹されている。IMF・JC一同盟は「春闘の要求は物価上昇率+2%としてものがゼロになることもある」「国民経済との整合をもつ社会契約的な運動をめざす」と主張し、彼らが一般的な組合主義ではなく、帝国主義の延命の尖兵であることを誰の目にも明らかにした。彼らの関心事は、もはや春闘のヘゲモニーではなく、英国资本の社会契約とそのための政界再編——中道勢力の結集である。また彼らは、現在のその勢力基盤をなす鉄鋼・造船資本と一体化して、公然と兵器の国産と輸出とを要求し、日本資本主義の擁護と、日帝の侵略反革命の担い手としての姿をより鮮明にした。

総評民同にしても本質は同様である。「雇用賃上げか」の喝の前に屈服し、同盟IMF・JCのあとを追つて、労働者を社会契約路線へとひきびりこむこそ富塚——楳枝路線の別名であった。それは昨年の国労大會における「民主的統制」なる総評流経営参加路線にみられるごとく「左派」を誇った官公労をもまきこんで進行している。それは、国民春闘路線を支えた大産別共闘と議会内制度要求が、前者はあからさまな労使正常化経営参加へ、後者は社会契約——中間連合政府路線へと帰結したものである。かかる楳枝富塚路線は、今日「7%経済成長の達成のためしてかけられていることである。失業保険の雇用保険への改悪、最近の「離職者対策法」による首切りと争議つぶしの円滑化、また「賃上げを財界に指導するよう政府に申し入れる」（富塚・一月九日）地点にまで来ているのだ。

日本はこれを、より反革命的に体系化し、

訴法全面改悪の突破口をきりひらかんとするものであることは、もはやまつたくあきらかな事実である。時を同じくして二月十六日、西ドイツでは、弁護人ぬき裁判、接見制限、捜査権拡大を明文化した「テロ対策法」が成立した。西独社民政権シユミットを先頭にしてある。中間連合政府攻撃下で進行する破防法攻撃に對峙し、たたかう労働者人民は、刑法・刑訴法改悪策動を許さず、「弁護人ぬき裁判」立法化とたたかう戦列を強化せねばならない。

烽火

たように、三里塚の人民闘争の團結は、武装蜂起に結集し、最後までこれと運命をともにするにたる團結へと発展する不可避性と可能性を有しているのである。しかし同時に蜂起は次のような条件を必要とする。「マルクス主義こそが蜂起をまさに技術と呼び、蜂起を技術として取りあつかわねばならない。……」

第一に、蜂起が成功するためには陰謀や政党（もちろん小ブル党派の議会勢力をさして）に依存するのではなく、先進的階級に立脚しなければならない。第二に、蜂起は人民の革命的高揚に立脚しなければならない。第三に、蜂起は高揚しつつある革命の歴史の中で、人民の隊列と、弱くて中途半端で優柔不断な革命の支持者たちの隊列の動搖が最も強くなるような転換点に立脚しなければならない。蜂起の問題を設定する上での、これら三つの条件の点でマルクス主義はブランキズムと異なる（「マルクス主義と蜂起」・レーニン）。

三里塚闘争はこのような蜂起の条件が十分に成熟していない階級闘争全体の現実を背景にして、「小さな人民蜂起」の連続的・持続的実現をとうしてほかならぬこのレーニン主義的「武装蜂起の条件」を、先駆的・能動的に創出しつづけるたたかいとしての歴史的任務を負っている。三里塚闘争はいま「孤立した決起」の側面を階級闘争全体の現実から強要されている。資本主義を打倒し、共産主義をうちたてることのできる唯一の革命的、歴史的階級たる日本プロレタリアートは、いまだ量において質において、三里塚闘争に指導階級として登場しない。彼らは労働運動が社共制圧下にあることを根拠として、そもそも良質な部分ですら、被抑圧人民諸階級層内部の、もつとも組織的なもつとも戦闘的な潮流」としての登場にとどまっている。先進的農民大衆と先進的労働者の共闘關係は、直面する政治課題を実現するための戦術共闘的関係の枠組みを突破しえているわけではない。革命的プロレタリアートが三里塚の人民蜂起的決起の大爆発のただ中で、真に変革せねばならないのはこの現実総体である。三里塚闘争が輩出した先進的農民大衆を、武装蜂起一プロ独の大道をになう革命的プロレタリアートに建設せよ！このわれわれの革命的実践ストーリーガンともすびつけわれわれは、プロレタリア階級の大軍を革命的政治闘争の水路を通じて、決戦の三里塚へと組織せねばならないのだ。



三・四月闘争への革命的政治的決起を準備する全国の革命的プロレタリアートの同志諸君！われわれの任務を鮮明にしよう。

第一に、革命的政治闘争、全国政治闘争の領域における飛躍的前進をかちとることである。これを組合主義的政治闘争や、戦闘的大衆運動の総和にすりかえんとする右翼日和見主義・急進民主主義者との峻別を通して、わ

たよりに、三里塚の人民闘争の團結は、武装蜂起に結集し、最後までこれと運命をともにするにたる團結へと発展する不可避性と可能性を有しているのである。しかし同時に蜂起は次のような条件を必要とする。「マルクス主義こそが蜂起をまさに技術と呼び、蜂起を技術として取りあつかわねばならない。……」

第一に、蜂起が成功するためには陰謀や政党（もちろん小ブル党派の議会勢力をさして）に依存するのではなく、先進的階級に立脚しなければならない。第二に、蜂起は人民の革命的高揚に立脚しなければならない。第三に、蜂起は高揚しつつある革命の歴史の中で、人民の隊列と、弱くて中途半端で優柔不斷な革命の支持者たちの隊列の動搖が最も強くなるような転換点に立脚しなければならない。蜂起の問題を設定する上での、これら三つの条件の点でマルクス主義はブランキズムと異なる（「マルクス主義と蜂起」・レーニン）。

三里塚闘争はこのような蜂起の条件が十分に成熟していない階級闘争全体の現実を背景にして、「小さな人民蜂起」の連続的・持続的実現をとうしてほかならぬこのレーニン主義的「武装蜂起の条件」を、先駆的・能動的に創出しつづけるたたかいとしての歴史的任務を負っている。三里塚闘争はいま「孤立した決起」の側面を階級闘争全体の現実から強要されている。資本主義を打倒し、共産主義をうちたてることのできる唯一の革命的、歴史的階級たる日本プロレタリアートは、いまだ量において質において、三里塚闘争に指導階級として登場しない。彼らは労働運動が社共制圧下にあることを根拠として、そもそも良質な部分ですら、被抑圧人民諸階級層内部の、もつとも組織的なもつとも戦闘的な潮流」としての登場にとどまっている。先進的農民大衆と先進的労働者の共闘關係は、直面する政治課題を実現するための戦術共闘的関係の枠組みを突破しえているわけではない。革命的プロレタリアートが三里塚の人民蜂起的決起の大爆発のただ中で、真に変革せねばならないのはこの現実総体である。三里塚闘争が輩出した先進的農民大衆を、武装蜂起一プロ独の大道をになう革命的プロレタリアートに建設せよ！このわれわれの革命的実践ストーリーガンともすびつけわれわれは、プロレタリア階級の大軍を革命的政治闘争の水路を通じて、決戦の三里塚へと組織せねばならないのだ。

第二に、社共制圧下の労働運動における革命的左翼の政治的影響力を拡大し、階級深部からの労働者の政治的革命的決起をつくりだすたたかいの強化である。社共、民同、同盟指導部の資本主義救済、帝国主義主要路線承認のブルジョアジーへの合流路線を暴露し、労働者の出口なき怒り、不満、反抗に水路を与えて、これを組織化する能力と活動を増強せねばならない。生活破壊・首切り、合理化・賃下げ・倒産・組合つぶしなど資本の攻撃との対決の中から、革命党と固く結合した「革命の伝導路」を創出しなければならない。この「伝導路」を通じた革命的政治闘争の労働者内部へのもちこみ——ひきつづきわれわれの実践上の環はここにある。日本階級闘争のたたかいを圧倒的に前進させるであろう。

第三に、わが中央集権非合法党を、開始された階級的激動期の領導者、牽引者としてさらに鍛えあげ、一層の党的前進をかちとることである。わが総路線を深化し具體化し、社帝・右翼日和見主義との理論的一・組織的一実践的分岐を徹底しておしすすめ、階級闘争のあらゆる戦場とりわけ工場の中に非合法細胞

全国のたたかう労働者人民諸君。
三里塚の決戦の炎は燃えひろがっている。春期のプロレタリアート人民の攻勢は開始された。三里塚開港阻止決戦を先頭に、朝鮮・沖縄・狭山・刑法をめぐる革命的政治闘争に大胆にたちあがれ。

全国の人民決起とともに、日本における武装蜂起の序幕を戦取せよ。

帝国主義心臓部で国際主義的任務を完遂せよ・革命党!! 中央集権非合法党に結集し、武装蜂起一プロレタリア独裁の日本革命の大道をともに前進せん。

ト人民が生きんがため食わんがために決起した闘いと組織、彼らの情熱・献身・創意と結びつき、その運動の自然成長性と闘い、闘争の勝利を共産主義運動の前進の方向へと総括していかなければならない。即ち、プロ人組織のたたかいが強化されねばならない。開始された三里塚の人民蜂起的決起をさらに燃えあがらせ、この烈火のうちからレーニン主義的武装蜂起の条件を創出することこそ、われわれの三・四月における革命的政治闘争の中心的任務である。

第二に、社共制圧下の労働運動における革命的左翼の政治的影響力を拡大し、階級深部からの労働者の政治的革命的決起をつくりだすたたかいの強化である。社共、民同、同盟指導部の資本主義救済、帝国主義主要路線承認のブルジョアジーへの合流路線を暴露し、労働者の出口なき怒り、不満、反抗に水路を与えて、これを組織化する能力と活動を増強せねばならない。生活破壊・首切り、合理化・賃下げ・倒産・組合つぶしなど資本の攻撃との対決の中から、革命党と固く結合した「革命の伝導路」を創出しなければならない。この「伝導路」を通じた革命的政治闘争の労働者内部へのもちこみ——ひきつづきわれわれの実践上の環はここにある。日本階級闘争のたたかいを圧倒的に前進させるであろう。

第三に、わが中央集権非合法党を、開始された階級的激動期の領導者、牽引者としてさらに鍛えあげ、一層の党的前進をかちとることである。わが総路線を深化し具體化し、社帝・右翼日和見主義との理論的一・組織的一実践的分岐を徹底しておしすすめ、階級闘争のあらゆる戦場とりわけ工場の中に非合法細胞

反対同盟とともに

三・四月決戦へ進撃せよ 一・三月開港阻止へ実力決起

三・四月開港阻止決戦へと進撃する三里塚闘争は、一・二二幕張現地、二・六・七横堀大要塞、三・一現地・佐倉・三・二佐倉・鹿島・成田を一大戦場とし、全国から闘う労働者・農漁民・学生・勤労市民を一大結集させ、日本階級闘争の前進の中にその勝利的平地を刻印せんと、力強く闘いぬかれている。

我々はその只中で、決戦を決戦として準備し、ますます激烈化する日帝政府・公団の開港攻撃を爆碎し、その一切を武装蜂起とプロレタリア独裁の大道へと前進させる戦争に真向うから応え抜く決意を表明する。

全国プロレタリア人民は、全国委と共に、三・二六から連続する一大決戦に大断固決起せよ！

幕張現地闘争

1.22

一月二十二日、幕張公園は三千にのぼる労農学で埋めつくされた。ジェット燃料貨車輸送のための幕張駅折り返し工事着工を阻止すべく全国からたたかう人が結集したのだ。集会は動労千葉地本と反対同盟の力強い連帯のもと、終始一貫、戦闘的気運いつぱいに貫徹された。幕張駅を包囲するデモンストレーションにうつる。決戦勝利、着工阻止のシュプレヒコールを、幕張の街路と駅構内にとどろかせられた。幕張駅を包囲するデモンストレーションにうつる。決戦勝利、二月六日未明、五・六反革命非暴力運動にわれわれは一大打撃を与えたのである。一・二二闘争の爆発にあわてふためいた日帝公団は、六日後、総評富塚らの

五日夜半の千葉地裁による

ジェット阻止闘争宣言

3.1~2



横堀要塞決戦

2.6 ~7

三里塚二・六・七横堀要塞決戦の成果を、へ武装蜂起の前夜の時代へを切り拓く旗印へと押し上げよ！

二月六日未明、五・六反革命非暴力運動に先頭とする要塞死守隊と共に、三・二〇開港にかけた三里塚闘争の闘争を断固として担い抜いた。向わんとする闘いを、へプロ武装蜂起→プロレタリア独裁へを切り拓く勝利への闘いに転化すべく、首尾一貫して闘い抜いたのである。

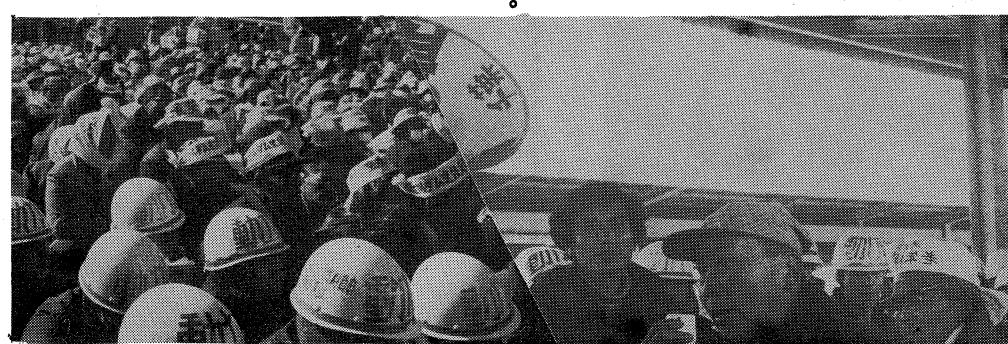
日帝公団は、

五日夜半の千葉地裁による

事件に基く非合法な刑事

三・四月決戦へと進撃する三里塚闘争は、三・一現地・佐倉を中心とした。このはじめとして、当日、四千の機動隊を動員しての現場にかけつけた婦人行動隊、起集会と連絡して、敵権力・機動隊への白色テロ、隊六千と対峙し、決戦への布陣を畑へのブルド

3.1~2



ジェット燃料備蓄輸送阻止に決起した反対同盟、千葉動労 (3.1~2)

三里塚

1.22幕張工事阻止現地闘争に三千名 (1.22) が行なった。

2.6 ~7 横堀要塞決戦を行なった。

3.1~2 ジェット阻止闘争宣言を行なった。

事件に基く非合法な刑事

三・四月決戦へと進撃する三里塚闘争は、三・一現地・佐倉を中心とした。このはじめとして、当日、四千の機動隊を動員しての現場にかけつけた婦人行動隊、起集会と連絡して、敵権力・機動隊への白色テロ、隊六千と対峙し、決戦への布陣を畑へのブルド

1.22幕張工事阻止現地闘争に三千名 (1.22) が行なった。

2.6 ~7 横堀要塞決戦を行なった。

3.1~2 ジェット阻止闘争宣言を行なった。

事件に基く非合法な刑事

三・四月決戦へと進撃する三里塚闘争は、三・一現地・佐倉を中心とした。このはじめとして、当日、四千の機動隊を動員しての現場にかけつけた婦人行動隊、起集会と連絡して、敵権力・機動隊への白色テロ、隊六千と対峙し、決戦への布陣を畑へのブルド

1.22幕張工事阻止現地闘争に三千名 (1.22) が行なった。

2.6 ~7 横堀要塞決戦を行なった。

3.1~2 ジェット阻止闘争宣言を行なった。

事件に基く非合法な刑事

三・四月決戦へと進撃する三里塚闘争は、三・一現地・佐倉を中心とした。このはじめとして、当日、四千の機動隊を動員しての現場にかけつけた婦人行動隊、起集会と連絡して、敵権力・機動隊への白色テロ、隊六千と対峙し、決戦への布陣を畑へのブルド

せたこと、しかしジエットを許すわけにはいかない」と決意が明らかにされた。

動労千葉の戦闘的な十二時間ストと結合したこの集会は、二・六七横堀攻防において逮捕された反対同盟全員奪還の報告と共に同盟の組織的結束力と結合し、権力士を迎えるや頂点に達し、反対同盟は、集会において「反対同盟十二年の歴史をかけた決戦に突入する…岩山台地の砦を未来永劫空港反対の拠点とする」と、三里塚闘争最大の決戦局面の凝縮された闘いと成果を日本階級

闘争の中に刻みこむことを決意した。

三・二は、早朝、佐倉での阻止闘争と鹿島での集会・デモを受け

全国のたたかう闘争と先闇的労働者人民の闘いをもつて権力の戒厳令体制を粉碎し、三・二六・三〇開港阻止決戦の布陣を打ち固め、

今春日帝の侵略反革命と中間連合政府攻撃と

勝利の水路をさらりと拡大せよ、ともに三、四月現地大闘争へ、

た開港阻止決戦のつてきひらかれてる三里塚闘争の人民的爆発を戦取したのである。

たる三里塚闘争の人民的爆発を戦

たる三里塚闘争の人民的爆発を戦

トと結合したこの集会は、二・六七横堀攻防において逮捕された反対同盟全員奪還の報告と共に同盟の組織的結束力と結合し、権力士を迎えるや頂点に達し、反対同盟は、集会において「反対同盟は、集会において「反対同盟十二年の歴史をかけた決戦に突入する…岩山台地の砦を未来永劫空港反対の拠点とする」と、三里塚闘争最大の決戦局面の凝縮された闘いと成果を日本階級

闘争の中に刻みこむことを決意した。

三・二は、早朝、佐倉での阻止闘争と鹿島での集会・デモを受け全国のたたかう闘争と先闇的労働者人民の闘いをもつて権力の戒厳令体制を粉碎し、三・二六・三〇開港阻止決戦の布陣を打ち固め、

今春日帝の侵略反革命と中間連合政府攻撃と

勝利の水路をさらりと拡大せよ、ともに三、四月現地大闘争へ、

た開港阻止決戦のつてきひらかれてる三里塚闘争の人民的爆発を戦取したのである。

たる三里塚闘争の人民的爆発を戦

たる三里塚闘争の人民的爆発を戦

1.28

狭山 東京集会に八千

四・五月再審却下攻撃を粉碎せよ！

七五年一・二八狭山上告趣意書

と獄中転向の強要を打ち破り、不提出三周年を前にした一月二七日

屈の闘志を燃やす石川氏の決意を

主催の下、部落大衆・労働者人民

我がものとした。

再審請求却下攻撃粉碎・再審闘争

と獄中転向の強要を打ち破り、不提出三周年を前にした一月二七日

屈の闘志を燃やす石川氏の決意を

主催の下、部落大衆・労働者人民

右翼日和見主義のレーニン主義戦術の歪曲とたたかひ武装蜂起戦術（路線）を堅持せよ

(下)

第二章

日和見主義の戦術原則上の動搖

我々は第一章をもつて、我が同盟の戦術を規定する重要な立場——政治上の立場を検討した上でマルクス主義、レーニン主義の原則を検討した。

我々はまず日帝の侵略反革命、中間連合政府——官僚的、警察的独裁攻撃を日本帝国主義国家権力の粉碎に結合させとらえることを確認してきた。これを、バラバラあるいはその一部をもってしかとらえないならば、それは、政治上の動搖と日和見主義以外なものでもない。

第二に我々は、武装蜂起とプロ独を切り離しえないので統一としてとらえ、統一としての武装蜂起——プロ独を世界革命、世界社会主義の歴史的过程であるとらえた。狡猾なカウツキー主義者は、プロ独を社会主義への不可避免的歴史的过程であることは、言葉の上で承認する。そして用心深く、プロ独をプロレタリアートの武装蜂起と切り離し、プロ独を世界革命と切り離すのだ。このようにして第三に我々は、「自然成長性の戦術」から、マルクス主義、レーニン主義の戦術を革命的プロ——中央集権合法党の「指導の戦術」へと分歧させた。それは、大衆の現在的状況を、武装蜂起——プロ独へと発展させ組織していく目的意識的な首尾一貫性である。従って、断固として、このような戦術原則は、他のどのような組織でもなく、唯一、鉄のレーニン主義こそプロレタリア大衆と党を峻別することによってプロレタリア大衆と最も結合することを唯一可能にしたのである。

1 カウツキー主義 戦術テーゼの 反革命性

加納（紅旗）一派は、革命的労働者の内部に送り込まれた右翼日和見主義の典型である。七七年春、我々の党派闘争の重圧の前に彼らは

分裂した。しかし、組織の名称と当面の動きに違いはあるても、右翼日和見主義者の理論と路線は基軸において同一である。従って、我々は右翼日和見主義への全面的党派闘争の発展のために、革命的プロレタリアートを、党建設に結集せしめる為に、加納（红旗）一派を右翼日和見主義、カウツキー主義の代表として登場させ、彼等のペテンを最後まであきだそう。その闘いは、また我々のレーニン主義戦術をその原則において確立する闘いでもあるのだ。

この作業に入る前に、彼等の本家カウツキーワーの戦術テーゼ的発言をいくつか見てみよう。引用が少々長引くが、加納一派のレーニン主義歪曲の手口を見る上で無駄にはならないだろう。

「革命は革命が達成される条件の違いに応じて様々な異った形態をとりうる。革命は決して暴力や流血と不可分ではない。すでに世界史的には、支配階級は充分な洞察力をもち、弱体化して臆病にもなっているので、必要に直面すれば自発的に降伏するであろうことが分かつている」「民主主義の国家によって、民主主義の強化によって武装闘争は、社会的衝突は、平和的な宣伝や投票で解決される。労働者階級の圧力手段としてのマッセンストでさえその利用はますます少なくなっている」「産業の急速な発展とともに軍事的手段ではなく経済的方法が次第に国家において決定的なものにならざるを得ない。資本家達は、かつての封建領主のように、その軍事的優位性によって大衆を支配しているのではない」

（エングルス、マルクスの『國家は一階級の他の階級への支配の機関である』に反対して）反対に民主国家（ブルジョア民主国家）は従来の諸体制においてそうであったような少數者の機関ではなく、人民という多数派のつまり勤労階級の機関なのである。それがなほ少数者の機関である場合には、その原因は国家の本性にあるのではなく統一、認識、闘争能効力を欠いた勤労階級にあるのである」「今日、民主主義の発展によって、国家は民主主義に包囲されており、いかなる侵略的な目的をも追及せず、自国の防衛のためにもほとんど軍隊を必要としていない。これは国際連盟が合理的に組織されているからである」一見して明らかなごとく我国においても世界においても今日の社会党と、日共、仏共、伊共党によつて最も露骨に踏襲されている。以上のカウツキーの戦術上の立場は、レーニンの「帝国主義論」「国家論」に対する正面からの敵対物「超帝国主義論」の戦術面への適用以外の何物でもない。我々はカウツキーワーの根本的な方法が帝国主義段階の特質を資本主義一般に不斷に解消することにあり、実践的には、帝国主義戦争を偶然的なものと見なし、もつて帝国主義を免罪し最高の発展段階としての資本主義を美化することにあることをはっきりと知っている。カウツキー主義こそは十九世紀後半にラサール主義者が夢想した『自由な人民国家』が資本主義の発展によって、今日実現したとプロレタリア人民に思はれさせること。それ故、今日残っている「革命の事業」とは、この国家をより一層民主化すること。国際連盟及び、その他の国際（当然その本質は帝、社帝のとり引きの場であるのだが）的諸組織を民主化すること以外の何物でもないと人民に信じ込ませようとすることなのである。

さて、歴史的なカウツキー主義は、かつてレーニンの時代にも露骨なプロレハノフ主義と巧妙に隠ぺいされたカウツキー主義の相互補完の反革命事業であったように、我々の時代においても露骨な、社共と隠ぺいされた右翼日和見主義（四トロ・加納一派）の相互補完をもつて革命的プロレタリアートへの敵対をなしているのだ。

1978年3月25日

2 当面する任務をめぐる

右翼的逃亡

彼らは、その仰々しくもかざりたてた『戦術テーゼ』の『情勢の特徴』で次のように言っている。「ブル階級と米帝は我国の人民に對する支配を議会制度を媒介にブル民勢力を糾合することによって……」「日共は……ブル階級と米帝の動搖する支配を左から支えていれる」と、これは彼等の『綱領』たるものの中の『日本におけるプロの当面する任務』の項の「この（日本の）ブルジョア独裁国家は……」と、我国のプロレタリアート人民に對する階級支配を米帝の力によつて補充し、米帝に著しく依存している」と、全く同一の決定的な右翼的逃亡を示している。

彼等は、単に日本資本主義が帝国主義段階であることを否定しているのみではない。中國共産党が、そのプロ独国家防衛の世界戦略上、ソ連社帝、米帝にその闘争の焦点をしほりつていていること（そしてこの中国の世界戦略を）当然我々は誤りであると批判しているのだが、と同列に論じられる誤りとも根本的に異なる日本帝国革命における、日帝の全面的な免罪である。我々は、他国的具体的状況下で『主要な敵』が何かという時に必ずしも日帝が入るところを考えてはいない。我々はただ、世界の『一般的』な『主要な敵』が帝、社帝であることと知っているのである。同時に、帝国主義本国の革命の戦術原則に自国帝國主義打倒が必ずかかげられねばならないことをもレーニン主義と、革命の歴史によつてまたはつきりと知つてゐるのだ。

彼らは 何故にこの米帝に次ぐ日帝を日本資本主義一般に解消するのだろうか。加納（紅旗）一派は、中国の『主要な敵』論を利用して、まかりなりにも『国際主義』を望んでいるのではなくカウツキー超帝国主義論を言葉の上では否定し、あたかもレーニン帝国主義論に立つかのごとく、米帝の存在は、認めるところに彼等の社共の補完物たる巧妙さがある。このようにして彼らは自国帝国主義打倒と不可分に結びついた日本プロの国際主義的任務と、日帝国家権力の国内人民に対する反革命支配との闘争をプロレタリアートの双肩から降すことを画策している。

かつてレーニンはその帝国主義に関する分析と見解の中で一般的に、資本主義の発展の最高段階が、帝国主義であることを明らかにしたのではなかった。それは、帝国主義が国内被抑圧階級を搾取することにとどまらず、これを分断支配し、排外主義を育成し、巨太な国家権力をもって人民を諸外国への侵略分析に動員するものであること。帝国主義がその植民地（新植民地主義）支配をもって、

3

加納（紅旗）一派

加納（紅旗）一派の「綱領」と「戦術テーゼ」は、彼等の実践が、日本プロレタリアートの自国帝国主義打倒の任務と真正面から敵対することにその犯罪性が暴露されねばならない。彼等の「戦術テーゼ」なる仰々しい文書の中に、ただ精一ぱい、自国帝国主義打倒に関する部分をたとえその片りんでもと探してみよう。ただ一つである。その政治闘争の項の(四)に、「同盟は支配勢力の間で、ブルジョア民主主義、平和主義の政治体制を反動と暴力、侵略と戦争の政治体制へと移行させる志向が増大していることに対する労働者階級の階級闘争を発展させる上で有利な条件を確保する見地から又、労働者階級の国際的結びつきを発展させる上で有利な条件を確保する見地からそれとの闘いも重視する」と。

解しようもなく簡明にそして、徹頭徹尾プロレタリアートの國際主義の内実である。帝国主義主義戦争と切り離しえないこと、帝国主義主義の三侧面—帝国主義間強盜的抗争と『後進国』への侵略反革命戦争、自国プロレタリアートへの侵略反革命への動員の暴力的遂行—これらもまた決して切り離しえないものであります。ここから帝国主義の打倒は加納（红旗）一派が、プロレタリア國際主義の發展をめざすとおしとどめる為にペテン的に利用する、資本主義生産様式が一般的に作りだす資本とプロレタリアートの國際性の承認とは全く異なる。プロレタリアートの意識的な國際主義として我々の課題になるのだ。

済的地位が資本主義的生産様式の行われてい
るすべての国々、地域で同一であり、また世
界交通や、世界市場の発展によつて、ますま
す緊密に結びつけられているので、プロレタ
リアートの解放運動は国際的な運動にならざ
るをえなかつた」（加納（紅旗）一派綱領）と。
プロレタリアートの運動は、そもそも歴
史的誕生期から、プロレタリアートの経済的
条件、資本主義の性格そのものに規定され
た「國際性」を内包していることは余りにも當
然のことである。しかしこの誕生期以来の
「國際性」について、は、うつかり忘れていた
こととは月とスッポンほどの違ひがあるのだ。
彼らは、その綱領にせめても、「その誕生期
から」という一言を入れるべきだった。そう
すれば「帝国主義の時代におけるプロレタリ
アートの目的意識的な帝国主義打倒に関する
國際主義」については、うつかり忘れていた
のだと言いわけも出きようというものだ。

帝国主義はその經濟的、政治的、軍事的本
性故に、相争う帝国主義間の、帝国主義と被抑
圧国のプロレタリアート人民を、单一の敵に
向つて決起させ、連帶させざるをえない。そ
してこの決起と連帶の全過程は、革命的プロ
レタリアートの「組織」＝党によつて目的意
識的に組織される以外に決して実現出来ない。
何故なら、その全過程とは、圧倒的な軍事力
をもつ帝國主義との血の戦争であり、巨大な
排外主義・社会排外主義とプロレタリア国际
主義との鬭争であるからだ。

レーニンは言つた「帝国主義戦争を内戦へ
！」と。このスローガンこそ、帝国主義の時
代に全世界のプロレタリアートに呼びかけら
れたプロレタリア国際主義の戦術原則なので
ある。加納（紅旗）一派は憶面もなく「我々は
全國民的政治危機に入りつつある」（戦術テ
ーブ「情勢の特徴」）と言ふ。全國民政治危
機とは何を意味するのだろうか。これを説明
して彼等の「戦術テーブ」は次のように言つ
ている。「同盟は、支配勢力の間で、ブルジ
ョア民主主義、平和主義の政治体制を、反動
と暴力、侵略と戦争の政治体制へと移行させ
んとする志向が増大していることに對して、
労働者階級の階級闘争を發展させる上で、有
利な条件を確保する見地から、また労働者階
級の国際的結びつきを發展させる上で有利な
条件を確保する見地からそれとの闘いも重視
する」と、彼等の「全國民的政治危機」とは一
点の疑いもなく現情勢が「ブルジョア民主主
義、平和主義」というこの上なく幸せな時代
なのに「反動と暴力、侵略と戦争の政治体制
へと移行させる志向が増大している」と嘆く
ことなのである。なるほどこのように現情勢
を見るところのできる人には、我国の資本主義
は帝国主義どころか「戦争」を阻止する為に、
日本ブルジョアジーを支持し、日本資本主義を

と理解できるというものだ。

救いようのない右翼日和見主義のこのような「理解」の上で彼等の綱領が「帝国主義世界大戦の可能性もまた依然として存在するがしかし世界の主な傾向は革命である」といえる。「加納（紅旗）一派「綱領」）と、帝国主義戦争を世界大戦という一つの形態のみでとらえ、今日の世界の現実の帝国主義戦争、日帝の現実の帝国主義戦争は「帝国主義戦争ではないのだ」とプロレタリアートに信じさせようと理解できる。

そしてだから彼等が「帝国主義戦争を内乱へ」なるレーニン主義戦術原則に敵対し、帝国主義戦争と革命を切斷された別物として、把えることをプロレタリアートに信じさせようとするのも彼等にとって不可避であることを我々は理解するのだ。

4

右翼日和見主義の

もうひとつの

原理上のゴマカシ

我々は、右翼日和見主義の革マル主義への水先案内人、加納（紅旗）一派のペテンと歪曲から、マルクス・レーニン主義の革命の戦術原則を、「自国帝国主義打倒／帝国主義戦争を内戦へ」を掲げて分岐せしめてきた。さて、我々は次に、彼らがプロレタリアートの武装を「大衆の武装」なる言葉をもつてどのように革命的プロレタリアートの武装蜂起の今日的準備と無縁なものにしているかを見よう。

我々は第一章で、プロレタリアートの革命が暴力革命なくしてありえないことを再確認してきた。それはプロレタリアートの革命が賃金奴隸としての自己のブルジョアジーへの経済的従属を断ち切ること、資本主義生産様式を廃絶することを意味するが故のみではない。

それは第一に、ブルジョアジーの被抑圧階級支配が国家による暴力的支配をしてあるが故である。ブルジョアジーとプロレタリアートの階級対立の非和解性の產物として作りだされた資本主義国家は、プロレタリアートと被抑圧階級を搾取する道具であり、支配階級の為の武装した人間の特殊な部隊—警察、監獄、軍隊等をもつてする支配の道具なのである。プロレタリアートは自己の解放のためには、賃金奴隸としての自己の解放のために、この国家を、ブルジョアジーの支配の為の國家を粉碎することなくしてありえないのも、またこの国家の粉碎がプロレタリアートの暴力をもってしかたし得ないのもこれ故である。第二には、我々の直面するブルジョアジーの国家が帝国主義の国家であるが故であった。我々の直面する革命が暴力革命以外の何物で

もないことを確信することは以上のどれか一つではなくその全体を確認することである。

加納—紅旗一派は口先ではもともともらしく「この社会革命は……必然的に暴力革命とならざるをえない。何故ならブルジョア国家権力はブルジョア階級独裁を維持するための道具であり、プロレタリアートはできあいの国家権力機構をそのまま手に入れて利用することはできず、これを粉碎しなければならないからである。」（綱領）と述べている。これがマルクス主義の国家規定としたら余りにも一知半解である。これが暴力革命の必然を証明したつもりなら何一つ暴力革命の必然は証明されていない。むしろ巧みに暴力革命を絵空ごとにすりかえている。

彼らはブルジョア国家権力が階級独裁の道具であること、プロレタリアートはできないの国家機構を粉碎しなければならないと言う。そうだ！ここまでではその限りではこれはマルクス主義の言葉である。ところが、マルクス主義は国家が階級独裁の道具であることを証明し難い。国家権力は決して道具一般の中で論じられるのではなく、特殊な武装力、暴力装置としての国家を発動する武装した支配権力として把えられねばならないことを明らかにしたのである。

加納—紅旗一派は、まず国家の階級支配としての暴力性と国家権力の階級支配の為の具体的な暴力装置を見ぬふりをし、暴力革命をマルクス主義の国家論の中にしっかりと結びつけるプロレタリアートの理論に敵対するのである。我々はレーニンがその国家論で、国家機関を支配階級に奉仕する武装した人間の特殊な部隊であると見ていることを見過してはならない。支配階級の独裁のための国家機構は、機構であるまえに支配階級の人間の武装力なので、国家機構に支配の生命を与えているのは支配階級の人間の武装力なのである。だからマルクス主義が「出来あいの国家機構をそのまま手に入れて利用することはできない」というとき、それは支配階級の国家機構を粉碎しなければならないことと全く同義のものとして支配階級の武装力を壊滅することを意味しているのである。

以上のマルクス・レーニン主義の原理上のゴマカシの上で、加納（紅旗）一派はどうにしてプロレタリアートの武装を絵空ごとにしているのだろうか。彼等はまず「武装」を「武装の必要性を説く」ことに転落させていた。次に革命的プロレタリアートの武装を大衆組織の武装にすりかえる。第三に、黒百人組の武装反革命組織

との武装対決を、反対運動に転落させる。第四に、経済主義・テロリズムなる転倒した悪口のもとに、武装蜂起の準備、非合法党の最も困難な任務遂行に敵対することを自らの信条にしているのである。そして、以上のペテンの総和として、レーニン・イスクラ時代の組織建設路線を歪曲して、加納（紅旗）一派式、日和見主義組織を「正規の攻団軍」だとぬけぬけといっているのだ。

そうだ我々も労働者人民大衆に暴力革命・武装の重要性を説くし、説きつづけるだろう。だがそれは「説く」ことによって「説」きうるものではない。暴力革命・武装の必要性を闘争、民主主義闘争を發展させること、これは一時も忘れてはならない。プロレタリアー

トは、大衆の生きんが為の経済闘争、民主主義闘争を、最も首尾一貫して發展させ、それを個々の分散された各個撃破される個別闘争から、統合され、部分ではなく、全体的な、運動の現在ではなく将来の目的とその大道を最も首尾一貫して闘いとりうる唯一の階級である。

大衆に暴力革命・武装の必要性を「説く」ことは、このマルクス主義者の見地と固く結合されなければならないのだ。大衆が自らの解放を暴力革命によつてのみ手に入れることを知るために、そのためには、武装することを確信するためには、大衆は自らの敵が何ものであるかをまず自己と他の運動に対しして知らしめねばならないのだ。我々が日本プロレタリアートの國際主義に武装された政治的任務—革命的政治闘争とその前衛の核を建設する闘いからはじめたのもこれが故である。

「革命的政治闘争」「日本プロレタリアートの國際主義的任務」このことを捨て去つた右翼日和見主義の「暴力革命と武装の説教」は、絶対に、決して一度も説かれることがないタテマエである。

彼らは更に「いわゆる大衆闘争・大衆組織の中で武装の強化を追求する。」といふ。これもまたしかりである。我々もそうするし、そうしなければならない。但し、「党と革命的プロレタリアートの武装」を「全人民の武装」をもつてすりかえないという前提の上でである。

これは自らの党を非合法党として建設するか、あるいは、加納（紅旗）一派のように「中央集権全国党」なる合法党として建設するかの最後の分れ道である。

「全人民の武装」このスローガンはブルジョア国家の常備軍を全人民の武装におきかえよ／＼たる意味のみでとらえられてはならない。そうではなく、それは次の二つの發展としてとらえられねばならない。軍事組織として準備された党に領導されてのみ勝利しうるプロ

レタリアーント(人民)の計画された武装蜂起。軍事組織として準備された党によってのみ組織されるプロレタリアーント(人民)の蜂起。の軍隊—プロ独の軍隊—世界革命の軍隊、これである。

世界の革命のどれ一つとして、日本における六十年代後半のどの局面の一つとして、このことを教えないものがあるだろうか。いつたい、階級の最も大衆的な闘争と組織とは、労働者の経済闘争と、その團結形態である労働組合であることをマルクス主義者をもって任する彼等が知らないともいうのだろうか。彼等はプロレタリアーントに対し、党と革命的プロレタリアーントの軍事組織の建設を「經濟主義、テロリズム」の雑言でもって切り捨てた上で「労働組合を武装せよ」とでもいうのだろうか。党の武装なくして大衆運動と大衆組織の武装をいうことは、こういうことをいつていることと全く等しいのだ。

いづれ、国際主義的政治任務に目覚めたプロレタリアーントは、その労組の壁を喰い破つて、労働組合として、あるいは、その労働組合の大衆を牽引して、必ず武装し、決起するであろう。しかし、それを可能にするためにも共産主義者—革命的プロレタリアーントの大衆武装の戦術とは、まずもって、大衆を武装させ決起させうる道とそれを勝利に向つて導きうる革命的プロレタリアーントの武装の戦術でなければならぬのだ。

6 戰術形態に関する レーニン主義

第三に、彼らの第四項「反動派が大衆を反革命的に武装させることに反対する」なるテーゼを見てみよう。彼らは他の右翼日和見主義と同様、黒百人組的反革命武装集団の出現を革命運動の前進の中で不可避的に形成されるものではなく偶然的な根拠のないものとみている。だからそれは反対すれば姿を消してくれるものだと何とか信じたいらしい。

彼らはレーニンが国家機構を支配階級に奉仕する武装した人間の特殊な部隊である、と見抜いたことに何の注意も払わない。「黒百人組的反革命武装組織」はその本質に於て支配階級の国家権力機構の特殊な発現以外の何物でもないのだ。特殊な発現、少なくとも我々は次のことを知っている。革命の気運が盛り上り、革命の中枢が着実にその組織を伸長し支配階級にその存亡の危機が迫り彼らの革命への恐怖が増大する時、支配階級は「黒百人組」を形成するし形成せずにいられないのだ。それはプロレタリアーントの革命の前進が右翼日和見主義との闘争に勝利しなければならないのと同様に避けて通ることのできな

い闘争である。革命的プロレタリアーントは必ず彼らとの血の武装闘争に勝利しなければならないのだ。加納一紅旗一派は自らの将来目標がそうであるが故に「黒百人組的反革命集団」を絵空事にしたいのだ。

第四に、彼らが経済主義・テロリズムの雑言のもとに片付けた「握りの先進的部分だけの武装を重視する傾向」についての検討に入ろう。我々は最早、彼らが中央集権非合法党の武装蜂起の準備・基本組織の軍事組織化について真っ向から否定していることについては触れない。我々はただ一九〇五年の大蜂起の一敗北の後のレーニンの次の言葉と、一七年の決戦を目前に控えたレーニンの次の言葉を彼等への回答にしておこう。そしてこの彼等への批判を更に現下の「パルチザン戦闘を行つてゐる諸君達」への我々のレーニン主義的見解を確立させることにしよう。

「そうだ、我々は蜂起の問題を日程から除外する根拠をもたない。我々は現在の反動期の諸条件という見地から党的戦術を新しく建て直してはならない。……我々は伝宣煽動組合の手段を広げる。ありとあらゆる「合法的な」手段を利用することを拒否せずに、だがこれら手段の確実さと意義について決して幻想を抱かずに蜂起の準備をしなければならない。我々は他の蜂起の経験を集め、それらについての知識を広め、頑強に我慢強く新しい戦闘力を準備し、一連のパルチザン戦の行動で戦闘力を訓練し鍛えねばならない。……我々は武装を備え、軍事的に組織され決定的な攻撃的行動に移れるように新しい爆発に向わねばならない。」(一九〇六年二月「ロシアの現状と労働者党的戦術」)

「支配的な」社会主義諸党が行つてゐるマルクス主義の歪曲のうちで最も悪意があり恐らく最も広まつてゐる歪曲の一つは、蜂起を準備すること、一般に蜂起を技術として取扱うこととは「ブランキ主義」であると称する日和見主義的なウソである。(一九一七年九月「マルクス主義と蜂起」)

加納一紅旗一派の「經濟主義・テロリズム」なる雑言は、まちがいなく革命的党に向けられた雑言である。しかし彼等はそれに真正面から反撃を喰うと「いや、それは党のことではない。ブランキストやパルチザン主義者のことなんだ。」と言い逃れんとするであろう。「經濟主義・テロリズム」なる彼等の言葉は本来のマルクス主義の規定とは関係もなく使いわけられる便利なものだ。だから我々は彼らの使いわけのもう一方のほう、ブランキズム、パルチザン主義者に対する右翼日和見主義者の見解に正面から我々の党の見解を分岐させておかねばならない。これは現下の政治情勢の中で重要な党の戦術上の見解である。

が支配し多くの戦士が希望を失つたままで放置されているような時、それでも生じる「パルチザン戦闘」は「革命への敵対物」の汚名を着せられる。このようなパルチザン戦闘が大衆を革命から引き離し、敵の弾圧を招き、

「共産主義者」の「まじめな活動」を妨害する、と。
だが、パルチザン戦闘が大衆を革命から引き離しているのではない。眞の革命党が未だ入ろう。我々は最早、彼らが中央集権非合法党の武装蜂起の準備・基本組織の軍事組織化について真っ向から否定していることについては触れない。我々はただ一九〇五年の大蜂起の一敗北の後のレーニンの次の言葉と、一七年の決戦を目前に控えたレーニンの次の言葉を彼等への回答にしておこう。そしてこの彼等への批判を更に現下の「パルチザン戦闘を行つてゐる諸君達」への我々のレーニン主義的見解を確立させることにしよう。

「そうだ、我々は蜂起の問題を日程から取

除く根拠をもたない。我々は現在の反動期の

諸条件

といふ

の

直してはならない。……我々は伝宣煽動組合の手段を広げる。ありとあらゆる「合法的な」手段を利用することを拒否せずに、だがこれら手段の確実さと意義について決して幻想を抱かずに蜂起の準備をしなければならない。我々は他の蜂起の経験を集め、それらについての知識を広め、頑強に我慢強く新しい戦闘力を準備し、一連のパルチザン戦の行動で戦闘力を訓練し鍛えねばならない。……我々は武装を備え、軍事的に組織され決定的な攻撃的行動に移れるように新しい爆発に向わねばならない。」(一九〇六年二月「ロシアの現状と労働者党的戦術」)

「支配的な」社会主義諸党が行つてゐるマルクス主義の歪曲のうちで最も悪意があり恐らく最も広まつてゐる歪曲の一つは、蜂起を準備すること、一般に蜂起を技術として取扱うこととは「ブランキ主義」であると称する日和見主義的なウソである。(一九一七年九月「マルクス主義と蜂起」)

加納一紅旗一派の「經濟主義・テロリズム」なる雑言は、まちがいなく革命的党に向けられた雑言である。しかし彼等はそれに真正面から反撃を喰うと「いや、それは党のことではない。ブランキストやパルチザン主義者のことなんだ。」と言い逃れんとするであろう。「經濟主義・テロリズム」なる彼等の言葉は本来のマルクス主義の規定とは関係もなく使いわけられる便利なものだ。だから我々は彼らの使いわけのもう一方のほう、ブランキズム、パルチザン主義者に対する右翼日和見主義者の見解に正面から我々の党の見解を分岐させておかねばならない。これは現下の政治情勢の中で重要な党の戦術上の見解である。

いっつい、レーニン主義者の戦術に対する不動の見地とは何なのかな。右翼日和見主義者が実際に陥つてゐる戦術、すなわち戦術原則の絶えまない浮動と戦術形態のかたくなな合法主義的固定、經濟主義的固定がそうなのかな。或いは断固たる戦術原則の首尾一貫性と戦術形態の柔軟性がそうなのかな。

それは第一に「マルクス主義は運動を何か一つの特定の戦術形態にしばりつけない点で全ての原始的な形態の社会主義とはちがう。マルクス主義は多種多様な戦術形態を認めるものであるが、その際それらの形態を思いつくのではなく運動の過程で自ら生じる革命的諸階級の戦争形態を普遍化し組織化しそれに意識性を与えるにすぎない。……マルクス主義はある場合だけ実行可能でその時機だけ行われる戦争形態にとどまるることは決してなく、その時の社会情勢の変化に伴つて、その時代の活動家の知らない新しい戦争形態が不可避となることを認めるものである。」

第二に「マルクス主義は戦争形態の問題を

：経済発展の種々の時機に政治、民族文化、生活様式、その他の条件の違いによって、いろんな闘争形態が前面に押ししされ、主要な闘争形態となり……」（一九〇六年「パルチザン戦争」）がそうである。

「はなかつた」なる一九〇五年の蜂起の敗北後、一齊にまき起つた日和見主義者の大合唱に抗して「武器をとるべきであった！」（「ロシアの現状と労働者党の戦術」一九〇六年二月）と、武装蜂起の旗を降すことなく、むしろ更に勝利できる武装蜂起への今日からの準備をよびかけた武装蜂起—プロ独を組織し領導する中央集権非法政党の建設のための闘いのただ中で、プレハーノフとの闘争として打ちだされていることを知らねばならない。即ち武装蜂起の大道を巡る闘いの上でなされてい

動する戦術形態のおしゃべりの一つにまで引き下げ「武装蜂起の考へに熱中する者」を否定し「むしろ直ちに労働組合運動を」と叫んだあのプレハーノフへの回答でもある。

もう一度レーニンの戦術形態に関する命題を見てみよう。「形態を思いつくのではなく、普遍化し組織化しそれに意識性を与えるにすぎない。」ここでこそ『党に領導され組織されたプロレタリアートの計画された武装蜂起』がそれ以外の道はないものとして打ち出されている。あらゆる現実の、そしてかつての歴史が教える階級の自然発生的な闘争の諸形態に拠跪するのでなく、説教を対置するのではなく、普遍化され組織化され意識性を（即ち闘争の終局目標を）与えられた闘争形態（戦術形態）こそがレーニンの武装蜂起である。それはまた革命の歴史的経験の総括なのである。

第四期党建設への 戦闘宣言

我々は烽火三一三号と本号をもつて、共産

主義者同盟（全国委）が立脚する戦術上の原則的立場を明らかにしてきた。それは、第二次ブンド総括、12・18路線下党内闘争、全国委党内・分派闘争を貫くレーニン主義党建設

の一一定の成果であり、全国委三〇一号路線一期二期の苦闘の総括として、その第三期突入に際し昨年三月全党会議によつて採択されたものである。

我々は今これを、三〇一号路線第四期への
突入に際し、我らと共に行軍せんとする凡て
のプロレタリア兄弟姉妹に公表する。

われわれの

ユネーブ体制の崩壊・民族解放社会主義勢力の偉大な前進は、今やとりわけ、帝国主義本国プロレタリアの歴史的任務遂行を要求している。最終的危機に逢着した資本主義は、帝国前に立ち現われる。社会帝国主義はこの帝国主義戦争の最も反革命の一翼へと転落する。これが支配の現実であり、且つ、不可逆的に激化する現実である。民族解放社会主義勢力の偉大な前進は、今や、その成果を、ブルジョア民族国家へと転落させるか、あるいは、社会主義革命の勝利へと発展させるかを問う一歴史時代へと入った。帝国主義本国プロレタリアートの今日的任務は、自国帝国主義の侵略反革命・中間連合政府攻撃を粉碎し、武装蜂起—プロレタリア独裁を実現することをもってはじめて全世界プロレタリアートに応えうる。踏みしめるべき勝利への進路はレーニン主義である。

マルクス主義を現実のブルジョアジーとそこの国家の打倒へと実践し、プロレタリアートの武装蜂起と独裁を実践したレーニン主義は帝国主義段階に於けるプロレタリア革命の指針へとマルクス主義を継承発展させることをもって、ロシア革命と世界党建設を勝利させ得た。今日の全世界革命的プロレタリアート・共産主義者の任務は、このレーニン主義を過渡期世界へ継承発展する党建設の闘いと結合してはじめて共産主義革命を荷うものになります。厳として問わるべきは、階級闘争一般ではなく、現下の階級闘争を共産主義革命へと領導すべき革命的プロレタリアートの任務なのである。

従つて、革命的プロレタリアートは、帝国主義打倒の闘いを、社会帝国主義・右翼日和見主義の闘いと固く結合して人民の眼前に提起しなければならない。第二に、社会帝国主義批判を、スターリニズムに対する根底的批判としてなさねばならない。第三に、右翼日和見主義のカウツキー主義的仮面をひきはがし、反スターロツキズムの左右の現われから激しくレーニン主義を分岐せしめねばならない。

この闘いは、解党主義者の反レーニン主義的綱領サークル遊びを、それにふさわしいド

□沼に散らし、編領・戦略・戦術・組織の統合なる、理論・実践・組織の单一的総路線構築の闘いとしてのみ勝利しうるのだ。

唯一の、過渡期世界プロレタリアの確信点は鮮明である。世界党の建設、これである。

我国に於ける今日の党建設の闘いは、これに目標づけられねばならない。世界党建設・世界革命・世界プロレタリア独裁、すでに我が国のプロレタリアートの闘いをここへ結集させることを否定する者は、反レーニン主義である。共産主義者同盟は、60年代後半武装闘争の総括を通して、情況・叛旗・赤軍派への党的批判をもつてこの共産主義のための闘いを開始した。その闘いは更に12・18路線下、第二段階路線下での解党主義者・右翼日和見主義者との党内闘争をもつて三〇一号路線党建設にまで継承発展してきた。

プロレタリアートの団結の最高の質と型たるレーニン主義中央集権非合法党規定、そのことの中央委員会一田包甚・目黒格良、毛

烽火三一四号一面論文として公表した当面する日本プロレタリアートの政治的任務に関するテーマ、本号をもつて公表した戦術に関するテーゼは、かたく前記総路線と結合して革命的プロレタリアートの戦闘宣言である。我々は、ひきつづき烽火紙面をもつて、これを順次、兄弟姉妹の日々の戦場へ提起するであろう。我々は全力をあげて三〇一号路線第四期へ突撃する。開始された激動のただ中で、革命的プロレタリア建設戦を闘う徹底した分散と糾合、集中と峻別をもつて「武装せらる革命の伝導路」を構築するために、それはレーニン主義の真紅の旗の確立の一歩となるであろう。

第一章 鉄のレーニン主義前衛党の戦術（三一三号）

- 戦術を規定するわれわれの政治的立場
マルクス主義暴力革命論の発展と戦術思想について
マルクス主義蜂起とレーニン武装蜂起路線
レーニン暴力革命論と武装蜂起
レーニン主義宣伝・扇動について

日和見主義の戦術原則上の動搖（本号）

第二章 日和見主義の戦術原則上の動搖（本号）

- 7 6 5 4 3 2 1
カウツキー主義戦術ティーの反革命性
当面する任務をめぐる加納（紅旗）一派の右翼的逃亡
加納（紅旗）一派、自國帝国主義打倒のレーニン主義原則の否定
右翼日和見主義のもうひとつ原理上のゴマカシ
党の武装を“労働組合の武装”に歪曲する右翼日和見主義
戦術原則と戦術形態に関するレーニン主義
われわれの第四期党建設への戦闘宣言